

家畜損害防止関連情報

◆ 第5回 群管理は個体管理から(乳検の重要性)

～乳検で個体乳量をまず把握～

この10年間、岩手県内で牛群検診を行ってきたと感じたことは、牛群検定（いわゆる乳検）を実施している農家と、していない農家では、牛群管理能力に雲泥の差があることです。

「個体乳量の認識と乳量に見合った飼料給与」は酪農の“基本”ですが、個体乳量を認識していない牛群検定非実施農家では、これができておらず、飼料診断と血液診断が一致しません。これは由々しき問題です。

例えば、血液検査から「飼料中のでんぷん濃度が高すぎる」と診断されたのに、飼料診断では「でんぷん濃度が適正あるいは低すぎる」などということが生じます。このような状態では改善方針の立てようがありません。

乳検実施農家は、月1回乳量を計り、体重を計測し、繁殖情報などを記入することで、無意識のうちに個体乳量を含めた牛群の現状が頭に入っている人もいると思われます。

パイプライン搾乳が当たり前の今日、乳量を計測しないかぎり個体乳量はわかりませんから、飼料給与量決定の根拠が得られなくなります。フリーストールならなおさらです。

いくら乳量に応じた飼料設計をしても、それを実施できるはずがありませんから、結局、手間暇かけて行った牛群検診が単純な健康診断に終わってしまいます。

健康診断ならば血液検査だけですぐに診断を下せます。しかし牛群検診の場合、飼料設計という非常に重い責任がかかってきますから、診療所の獣医師が事前のデータ収集に時間を割き、現場検査と血液検査に1日、データ分析と飼料設計に1日以上はかけます。

その蓄積データは牛群検診の精度向上にも役立ちます。ですから岩手大学では、乳検実施農家にかぎっての牛群検診を実施しています。

乳検データ解析ソフトはいくつかあり、NOSA I 診療所には、乳検データ、牛群検診データ、繁殖管理データなどを統合した、新たに開発された牛群管理ソフトが配布されています。

乳検データからも牛群の状況はかなり把握できます。もし牛群検診を受けようと思う方がいれば、まず乳検から始めてみてください。

